

巻 頭 言

レンタルな生活

財団法人 不動産適正取引推進機構

常務理事 清 水 郁 夫

20歳代の頃、家をつくるなら自分専用の部屋を持つというのが夢でした。最低でも100平米くらい。部屋には何も置かない。例外は楽器、音響機器の類だけ……あれから30年余が過ぎたが、あの大部屋は夢のまた夢、自分の部屋すらないのが現状です。

子どもの頃に住んでいた田舎では、生活用具は何でも自前で揃えてあり、いろいろなものが蔵にしまってありました。節句の人形、夏の蚊帳、餅つきの杵と臼等々。盆正月の帰省者の布団類、法事に使う食器や座布団も人数分揃っていた。小屋には農器具だけでなく、たくさんのがらくたが置いてあった。物をしまう場所には不足しませんでした。

東京に出てからの住居では余分な空間はなくなりました。就職、結婚、子育てをして、転勤を重ねるうちに、御多分にもれず、買っては捨てることを繰り返してきました。五十を過ぎてようやく買う文化に決別し、借りる文化へと移行しつつあります。本やCDは図書館やレンタルショップで間に合わせることがほとんどです。選択の幅は格段に広がりました。例えば、数万円もする高価な絵画集だって2週間は独占できるのです。音楽部屋は夢の彼方ですが、貸しスタジオで練習する方が機器類は揃っているし、部屋や場所の選択もできます。

スポーツジムに行けば、いろいろな健康増

進の器具が置いてあり、プールや風呂もついています。自宅に体重計や血圧計は不要となりました。スポーツジムの会費は、これらの施設の月極レンタル料だと言えます。

コンサートの入場料は、鑑賞する座席の借料です。内外の名画の展覧会は、主催者を通じて鑑賞者（入場者）が共同で絵を借りていると考えれば、入場料はレンタル料の分担金になります。これらは、芸術家の共同パトロンになる参加費です。

電車やバスの運賃は、運搬サービスへの対価ですが、目的地までの座席を借りる対価とも言えます。マイカーではなく公共交通機関を利用することは、移動の手段について、所有から借用へと転換することです。電車やバスが貸切り状態になれば、車主の気分です。

家の話に戻ります。振り返れば、生まれてこの方住んだ家は十を超え、人生の半分以上は借家でした。狭くて古い所にも住みましたが、自分では持てないような家もありました。持ち家がいいのか借家がいいのか、戸建てか集合住宅かは、人によって、同じ人でも時々状況によって答えは異なります。住まい方（気の持ちようも含め）を工夫すればどちらも満足を得られるものだと思います。

所詮この世は「かり」の住処……ひょっとするとオイラの人生そのものが「かりもの」かもしれないなあ……